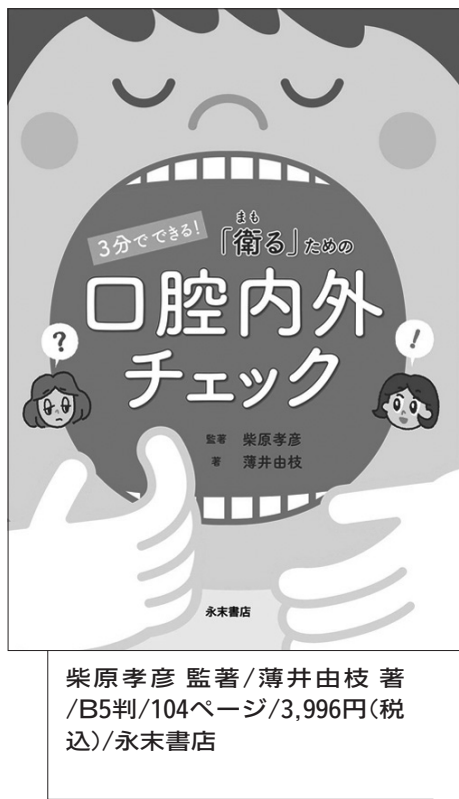


3分でできる！

「衛る」ための口腔内外チェック

著者に聞く

人生100年時代を迎えている。しかし、統計資料によると日本人の2人に1人はがんになるで、口腔がんについて東京歯科大学教授の柴原孝彦氏は、「増加傾向にあり、希少がんの域を越えている」と指摘する。「3分できる！「衛る」ための口腔内外チェック」(永末書店)は、口腔がんの第一発見者となる可能性が高い歯科医師、歯科衛生士が日々の臨床で、患者さんの口腔粘膜の変化を見逃さないポイントやその対応、評価等のノウハウを簡潔にまとめている。歯科衛生士である著者の薄井由枝さんに歯科医院における口腔粘膜チェックの必要性などを聞いた。



柴原孝彦 監著 / 薄井由枝 著
/B5判/104ページ/3,996円(税込)/永末書店

日本歯科新聞 2019年1月15日付

——本書の監著に携わった柴原教授は序文で「口腔がんが男性の高齢者をはじめ、女性や若い人にも増えていると述べています。臨床現場でそれを感じます」。

薄井 国民の健康意識の向上により予防への関心も高まっているためこれまで見過ごされてきた口腔粘膜の変化への気付きは増していると思います。しかし、それでも日常の臨床現場でとなるとまだ難しい面があるように感じます。

昔は治療ありきだったので、口腔粘膜の変化を注意深く観察するというよりは、フランクの付き員合やう蝕、不適合な詰め物、歯周水

ケットの深さなどを気にする方が普通でした。

本書はこれまであまり注意を払われていなかった口腔粘膜の変化について身近な症例を数多く取り上げているので、その知識や情報が患者さんとのさらなる信頼関係の構築に役立つと思います。

——日本の大学附属病院の勤務を経て、アメリカの大学で学ばれたのですが、口腔がんや口腔粘膜の見方は日本の違いはありますか。

薄井 欧米は治療費が高額なので予防に時間とお金をかけます。自分の体のメンテナンスは自己責任が基本です。

このあたりも日本の歯科衛生士との違いといえるでしょう。

——口腔内外の異常を見つけるために注意すべき点は。

薄井 加齢変化による萎縮なのか、病気なのかの違いについて口腔粘膜を注意深く観察することが大切です。これは歯科衛生士としての長い臨床経験が必要というより10人20人の患者さんでもしっかり見ていけば分かるようになるものです。しかし、その前提として正常な口腔内外組織の基本的な知識を身に付けておく必要があります。

——口腔内外の基本的な知識というのは日本の歯科衛生士教育でも学びますか。

薄井 もちろんです。歯科衛生士の世界のスタンダードな業務論として「歯科衛生課程」があります。口腔内外チェックはこの課程のアセスメントの中に位置しています。アセスメントデータを統合し、健康に関するリスクを明確にし、治療計画を立て、実施し、評価するという一連の流れですが、日本でも現在教育に取り入れられています。

口腔内の加齢的な変化については国試にも出題されるので、講義はありますが座学なのであくま



九州看護福祉大学看護福祉学部
口腔保健学科教授、歯科衛生士

薄井 由枝 氏

予防する

日本で口腔がんといえば口腔内をイメージしますが、アメリカでは頭頸部の内外部が対象となります。そのため初診時には患者さんの顔のほころびについてもその大きさを測り、3、4カ月後のメンテナンス時にはその変化をカルテに書き込み、形が少しでも変異していれば、歯科衛生士が皮膚科に紹介状を書きます。

そこにはメラノーマや基底細胞がんというほころびのようながんが北欧人に非常に多いという理由もありますが、アメリカでは国試に、頭頸部リンパ系の問題も出題されるので、そうした勉強がどうしても必要になります。

付いてくれます。そうした面からも、口腔粘膜の変化に関する知識や情報が役立つと思います。

——日本の歯科衛生士教育はそこまでカバーしていますか。

薄井 多くの口腔外科の先生がアトラス的な本を絵図入りで執筆、出版されているので、歯科衛生士もそうしたもので学んでいると思います。そのような理由で、この本の執筆依頼があった際、一度はお断りしました。

その時に、出版社の方から「口腔外科の先生方に書いていただく」と教科書になります。教科書はたくさんあるので、卒後の歯科衛生士が日常診療の中で気軽に読めて、すぐに使えるマンガのような本を作りたいのです」と言われ、臨床補助的な本ができればと承諾しました。

この本で使用している症例写真の7割は私が週2回、歯科医院勤務中に見た患者さんのものなので、毎日患者さんを見ている歯科衛生士さんには、どれも「あるある」の症例ばかりだと思います。そして、このあるあるこそが、患者さんの健康の保持増進にとって大きな宝物となるものなのです。

——歯科衛生士の役割の変化をどのように捉えていますか。

薄井 今、日本人の健康志向は急速に高まっています。テレビ番組である食品が健康に良いと放送されると、翌日にはそれが店頭からなくなるという現象も、その一例といえるのかもしれません。

そうした小さな変化を見逃さずに予防という観点から患者さんに対応していくのが人生100年時代の医療だと考えています。そして、そのためのサポートができる

最も身近な存在が歯科医療ではないでしょうか。

口腔内外をチェックし、小さな病変を発見したら、患者さんに伝え、体の変化に気付いていた。そのちょっとしたきっかけから患者自身が自分の日常生活を振り返り、より健康的な日常を取り戻す。さらに、高血圧や糖尿病の話ができ、時として患者さんの命を救うことができる。ことが歯科衛生士業務の目標となれば、歯科衛生士が果たす役割はもとより、ホリスティックな歯科医療も実現できると思います。

——この一冊はこれからの歯科衛生士の役割を考える上での大きなヒントになり、予防に特化した歯科医院経営を考える上での指針になりそうですね。

薄井 歯科医師の先生が歯科衛生士を信頼してくださった上で、患者さんの情報を共有、更新し、何か問題があった時にはいざ目と連携、対応できるという関係性がベストだと思っています。口腔内外のチェックは、二つの目で見るよりも四つの目で見た方が確実性はよりアップするわけで、患者さんも安心できます。そういった意味でも、先生方にもぜひ読んでいただければと思います。

「8020運動」が大きな成果を挙げ、高齢者のむし歯が減っているとの数字も発表されました。健康の保持、増進に向けての歯科医療はここからがスタートといえます。

本書には口腔内外チェックシート票と記入例も掲載しています。これらを参考に工夫すれば、全身管理のための判断材料となるものが増え、臨床現場を支える大きな力になると思います。

小さな変化を見逃さずに